

感動と思想のあいだに

—— Keats の場合 ——

福 間 欣 一

1

John Keats (Oct. 31, 1795–Feb. 23, 1821) の短かかつた生涯のうちで、詩人としての歳月は更に短い。我々の一年にも相当する生長を彼が一週間で成し遂げたとしても、また支離滅裂とも見える変貌を数日の範囲内で繰返していたとしても、その辿りついた高みを思えば、長命の大詩人の一生に劣らぬ詩魂の起伏をそこに読み取らねばならない。

その意味では詩人としての3年間は終始彼にとって危機の瞬間の連続であつたわけである。我々はその危機の訪ずれを到る所に見出すのであるが、1819年9月弟 George 夫妻に宛てた所謂 journal letter の一つに

“I have but lately stood on my guard against Milton. Life to him would be death to me. Miltonic verse cannot be written but it < *for in* > the vein of art—— I wish to devote myself to another sensation ——” (*Letters*, p. 425)

と注目すべき宣言を行つている。これが決して気紛れでないことは、上記の部分を書いたその同じ21日友人 John Hamilton Reynolds にも同様の趣旨の文面を書送つていることから明らかである。

“I have given up Hyperion—— there were too many Miltonic inversions in it——Miltonic verse can not be written but in an artful or rather artist’s humour. I wish to give myself up to other sensations.” (p. 384)

即ち Keats はこの日 Milton との袂別を決意した。理由として Milton は芸術家であつて、その余りにもラテン的な語法は英語の純粹性を害うものであるから随いて行けないと言うのであるが、Milton と「芸術」との結びつきは、当然これら両者をいかに Keats が感じ取つていたかということから考察されねばならないし、また、それぞれの受取り方が彼の詩人としての数年間において決

して不変でなかつたことも考え併せながら為されねばならないことである。

1819年9月における Keats が Milton 的な世界から逃れて求めていたものは依然として生涯続いた Shakespeare への憧憬であると言うことができるのであり、また実際この年に見られる、特に Odes の境地には、遂に彼が理想とするところに到達したという思いをさせられるのであるが、謂わば Shakespeare の世界は彼を遠巻きにしようとした世界であつた。その大詩人を遠くに望んで、その列に加わり難い焦燥感の中で彼が Milton に比べていたものは、むしろ Wordsworth の存在であつた。

我々は彼が早くから Wordsworth という同時代の高峰を遠く或は近くに仰いでいたことを知つている。つまり気になる存在であつたのだ、凡ゆる秀れた先輩詩人がそうであつたように。(先輩詩人への関心は Keats の場合ほとんど宗教的感情であり、執着であつた。) 1817年10月 Benjamin Bailey には “I am quite disgusted with literary Men—and will never know another except Wordsworth—no not even Byron.” (p. 51) と書いているのは、それより前、書簡の中に “Ode on Immortality” を引用したこともあつた程度に比較すれば、これはかなり明確な Wordsworth 讚美である。彼には文人仲間の交際は若くから勿論あつたけれども、軽薄な Cockneyism に反撥を感じることも屢々だつたようだから、これを単なる反動乃至皮肉として考えても、目標に据えるに足る一流詩人として一応 Wordsworth を挙げたわけである。更に数日後 “if Wordsworth had thought a little deeper at that Moment he would not have written the Poem at all——” と、批判をすると同時に大いに弁護に努めたり、“and yet I think Wordsworth is rightest.” (p. 55) と高く評価する口吻である。

1817年の Keats はその仲間の傾向も手伝つてまだ花鳥風月の域を出ないと云うるのであるが、11月 Bailey に有名な叫び “O for a Life of Sensations rather than of Thoughts!” (p. 67) を伝えた。これは “authenticity of the Imagination” の意味であり、想像力の勝利を信じた Keats の本領として死後数十年に亘つて評価された一節である。彼は想像が美として把えたものこそ真理であると言う。

“I am certain of nothing but of the holiness of the Heart’s affections and the truth of Imagination— What the imagination seizes as Beauty must be truth— whether it existed before or not— for I have the same Idea of all our Passions as of Love they are all in their sublime, creative of essential Beauty.”

想像は感動・感覚・官能であり、真理は思想・思索・哲学の同義語である。「思索よりは感覚の生活もがな」という提言の裏に、我々は十九世紀的評価を越えて、すでにこの弱年の詩人が感動と思想の二律背反を担い始めたことを見逃してはならない。“Ode on a Grecian Urn” (Apr. 1819) の結尾

“Beauty is truth, truth beauty,”—that is all
Ye know on earth, and all ye need to know.

に俟つまでもなく、上記書簡にも

“sure this cannot be exactly the case with a complex Mind— one that is imaginative and at the same time careful of its fruits— who would exist partly on Sensation partly on thought—” (p. 68)

と述べて、詩人としての大成を野心していることを暗示する。詩人として感覚の生活は不可欠であることを強調しながらも、“but also increase in knowledge and know all things” という友への勧めは、もとより自身の覚悟であると見るべきである。この二つの芽が生涯彼を苦しめると同時に彼を育てたのである。

1818年1月「Miltonの毛髪を見てのOde」(pp. 84-85)をJohn Taylorに送った彼は、翌月Reynoldsに現代詩人を読むべきだと書き、その中でWordsworthの名を挙げたが、

“for the sake of a few fine imaginative or domestic passages, are we to be bullied into a certain Philosophy engendered in the whims of an Egotist—” (p. 95)

と言ったのはEgotistなる評語によつて明らかにこの詩人への批判を含むものである。ここでWordsworthは哲学を代表する者として書かれている。この哲学者は“Lamia”(July 1819)のApolloniusがcold philosophyを象徴したように、理想としてのそれではなくなっていることは勿論である。「思想よりも感動を」願つたKeatsは同書に言う

“We hate poetry that has a palpable design upon us— and if we do not agree, seems to put its hand in its breeches pocket. Poetry

should be great and unobtrusive, a thing which enters into one's soul, and does not startle it or amaze it with itself, but with its subject."

との理由から、また Elizabethan poets との比較から、詩作の助言者 Leigh Hunt まで捲添えにして "I will have no more of Wordsworth or Hunt in particular——" と言った。そして言葉の端々に引用しているのが "Il Penseroso" や *As You Like It* からであることは意味のあることであろう。少なくともこの時期には、Milton と Shakespeare は哲学を押しつけてくることの無いが故に善き詩人として映っている。

同じく 1818 年 1 月末、再び Taylor に対し、詩の Axiom として先ず第一には "Poetry should surprise by a fine excess and not by Singularity——it should strike the Reader as a wording of his own highest thoughts, and appear almost a Remembrance——" ということ、第二には "Its touches of Beauty should never be half way ther<e>by making the reader breathless instead of content:" ということを挙げ、詩は太陽の如く自然にやつて来なければならない、そして読者をして "Luxury of twilight" に惹き入れるべきことを述べているが (p. 107)、これは彼の Ode 時代の実践において達成された Shakespeare 的たそがれの美、豊かなる悲しみの予言である。ここには冷たいだけの哲学の入り込む隙は無いように見えるけれども、果してこれら二つの時期の美は全く同質の美であろうか。

二十世紀に入ってから Keats の評価は「鉄石心」の彼となつた。実際に "My heart seems now made of iron——" (p. 369) とか "home speculations every day continue to make me more Iron." (p. 373) とかという表現も使っているが、1818 年 4 月における彼の言葉によれば、世の中に何か為さなければならぬ、それには思索が必要である、勤勉と哲学が大切だと再び考えている。これが唯美主義者 Keats という評価を "a grand march of intellect" (p. 143) の可能を信じる humanist Keats に変えた原因である。早く両親を失つた不幸な弟妹と自己をはじめ、産業革命の進行する社会の悲惨が背景となつて彼の心を固くさせるのであるが、いつか彼は「知識」を求め始める。

“I was purposing to travel over the north this Summer—— there is but one thing to prevent me—— I know nothing I have read nothing and I mean to follow Solomon’s directions of ‘get Wisdom—— get understanding’ —— I find cavalier days are gone by. I find that I can have no enjoyment in the World but continual drinking of Knowledge —— I find there is no worthy pursuit but the idea of doing some good for the world——” (p. 133)

と言つたあと、当然のことながら、自らの変化を意識して

“I have been hovering for some time between an exquisite sense of the luxurious and a love for Philosophy——were I calculated for the former I should be glad ——but as I am not I shall turn all my soul to the latter.” (p. 134)

と言い切つた。Keats の生涯を三期に分けるならば、これは彼が上記引用に仄めかした通り、この年の夏 Scotland に旅行をした前後に当る第二期の心境を概括するものと言えるであろう。(Byron や Shelley のように行動には移さないけれども、彼は今、共和主義者なのである。しかも己れの詩才と健康と恋愛の成立に危惧しながらもまだ全く望みを失つてはいない。)

彼が 1818 年に北国を旅したことは偶然ではないように思われる。そして彼はまた職業とすべき医学の研究を捨て切れなかつた。何故なら医学書は知識の象徴であり、彼が “Mystery of Law” (p. 139) を感じる内外の原因は、冷たく、峻しく、暗い、彼の咽喉を傷めるような結果になつた北国の風土と結びつくのであろうから。5 月 Reynolds に送つた手紙には

“An extensive knowledge is needful to thinking people—— it takes away the heat and fever; and helps, by widening speculation, to ease the Burden of the Mystery:…… It is impossible to know how far knowledge will console us” (pp. 139-40)

と言つている。従つて Wordsworth がやがて Keats によつて再評価されるであろうことは予想するに難くない。果して、Milton と Wordsworth の肌合が大いに相違することを認めながらも、Milton が人類の運命に懸念している度合に関する疑惑を洩らし、同時に Wordsworth の叙事詩的情熱と、人間の心情に殉ずる態度とを示唆している。

なお同書には人生を多くの部屋のある家に譬える有名な条り (p. 142) がある。そして自分は第一の「処女思想乃至無思想の部屋」を出て、暗い廊下を通

じて次の部屋を窺う段階であると言う。“the world is full of Misery and Heartbreak, Pain, Sickness and oppression——” (p. 143) という箇所は “The Fall of Hyperion: A Dream” (Aug.-Sept. 1819) の一節

“None can usurp this height,” return’d that shade,
“But those to whom the miseries of the world
“Are misery, and will not let them rest.” (I, 147-49)

と同じく、美によつて支配せんとする者が必らず通過しなければならない試練を指摘する。

“We are in a Mist. *We* are now in that state — We feel the ‘Burden of the Mystery’, To this Point was Wordsworth come, as far as I can conceive when he wrote ‘Tintern Abbey’”

と言い、更に “Here I must think Wordsworth is deeper than Milton ——” と Wordsworth を認識し、

“From the Paradise Lost and the other Works of Milton, I hope it is not too presuming, even between ourselves to say, that his Philosophy, human and divine, may be tolerably understood by one not much advanced in years,”

と言つて、ルネサンスの清教徒であり知性人であつた人物を子供扱いにしている。しかしそのすぐ後で “Yet Milton as a Philosopher, had sure as great powers as Wordsworth——” とも付け加える。(この時の哲学者とは神学者の謂であらうと思われる。) また7月旅先から Baily には、帰つたら Milton を読みたいと伝えている。(p. 190) 8月帰着、9月に宿命の恋の対象となるべき Fanny Brawne に初めて会つた。

翌1819年3月迄には弟 Thomas が死に、George 夫妻はアメリカに移住し、自らも健康を害し、かつ結婚できる見込みも立たなかつた。彼はもう第二期から脱皮し始めている。それはそれ迄のどの時期とも違う要素に浸透されている。羈氣に富んだ僅か一、二年前に比べて、次のようなことを言う彼である。

“Though a quarrel in the Streets is a thing to be hated, the energies displayed in it are fine; the commonest Man shows a grace in his quarrel—— By a superior being our reasoning<s> may take the same tone—— though erroneous they may be fine—— This is the very thing in which consists poetry; and if so it is not so fine a thing as philosophy—— For the same reason that an eagle is not so fine a thing as a truth——” (p. 316)

そして Milton の “Comus” から次の 3 行を引用する。

“How charming is divine Philosophy
Not harsh and crabbed as dull fools suppose
But musical as is Apollo’s lute” (II, 476—78)

Keats の Apollo は 苦悩を通過することによつて美的支配者として誕生するのであるが (*Hyperion*, III)、詩は理性や力だけでは創られない。もしそうであれば詩よりも真理や哲学の方がましである。そしてまたまた哲学は更に高い位置を与えられたが、同じ書簡の少し前の方で彼は Socrates と Jesus が持っていたと信じる “disinterested” (p. 315) という特質に触れている。しかしここに来るまで我々は幾度か彼の「孤独」を讃える書簡を痛々しく読まねばならないことか。1818 年 10 月には “I hope I shall never marry” とか “my Solitude is sublime……The roaring of the wind is my wife and the Stars through the window pane are my Children.” (p. 239) と言い、“I shall be no Solitary.” と強がり、“Think of my Pleasure in Solitude,” と弟夫婦を安心させようとしている。(p. 240) しかしこれが自分の「意志」で為ることであると言うに到つては、たとえ Keats を強め豊かにしたとは言え、飽くまでそれは孤独であり、寂しさであつたことを確信させられる許りである。1819 年 4 月、Keats は先の 3 月から書き始めた journal letter に続いて書き足した中に “La belle dame sans merci” (pp. 328-30) を挿入した。

1819 年は進んで 8 月、Bailey 宛に “Shakspeare and the paradise Lost every day become greater wonders to me. I look upon fine Phrases like a Lover.” (p. 368) と書き送つてから旬日を経て Reynolds 宛 “the Paradise Lost becomes a greater wonder.” (pp. 373-74) と書いている。

そして、唐突に見えるのであるが、冒頭に引用した Milton への反撥が一箇月に満たない期間の後に述べられるのである。

2

Wordsworth にせよ、Milton にせよ、哲学者と言ひ詩人と言ふとき、Keats が必らずしも首尾一貫した論理や定義を用いているとは考えられない上に、彼

等の実体もまた変つて来ているのである。例えば Milton を芸術家であるとして排した場合の Milton の実体は、計算された文体を持つが故に、むしろ理性と意志の権化として考えられる可能性は無いであろうか。我々は彼が Cromwell と携えて清教徒革命に狂奔した事実を知っている。また彼は離婚の経験を持ち、三人の娘に背かれた人である。予期しない「不寛容」の精神が Milton の本質であつたと言えないであろうか。少くとも Keats にとってそのような印象を生じる契機が存在するのではないか。その点については明らさまな言及に乏しいが、以上の本質が消極的な意味であつても Milton の作品と思想に反映していて、それが Keats に敏感に感じ取られた可能性は大きいように思われる。何故かならば理性と意志は「計算」の精神 (Lear 王の愚かしさでもある) であり、epic drama を書く精緻な文学であり、所謂「思想」に直接繋がるからである。彼はもつと自然で、温かく豊かな感覚が欲しかつた。Milton と正反対なのは、Keats が献辞において自作 *Endymion* (1817) を捧げた、Shakespeare に次ぐ英国的詩人、「秋」を連想させる Thomas Chatterton である。(cf. “The purest english I think—or what ought to be the purest—is Chatterton’s……I prefer the native music of it to Milton’s cut by feet.” p. 425) このことについてはまた後で思い出して頂きたい。

1819年11月 Taylor 宛

“I mean they would nerve me up to the writings of a few fine Plays—— my greatest ambition—— when I do feel ambitious. I am sorry to say that is very seldom.” (p. 439)

と言っているのは最後の力を振り絞つて Milton 的 drama から Shakespeare 的 drama への脱出を願つたもののように私には思われる。同年8月には戯曲 “Otho the Great” を完成しているが、11月戯曲 “King Stephen” は未完のまま放棄した。

武人であつたが、政治家としての度量もあり、或る程度の実際家であつた Cromwell に比較した場合、Milton の人間像はどんなものになるであろうか。John Middleton Murry は *Heaven—and Earth* の中で

“There is human warmth in *Paradise Lost*: no-one can mistake the breathing human passion of Adam and Eve in Paradise. But it cannot breathe in the atmosphere of Milton’s theology. Whatever his God may be, he is surely not a God of love, who yearns toward his own wayward creation.” (p. 150)

と指摘している。Milton は Cromwell よりも苛烈でなかつたとは言えない。しかし Keats の一生は愛を求めてのそれであつたとも言えるのであるから、Murry が復讐を誓う盲目の Milton を Cordelia のいない老王 Lear に譬えている (pp. 158-67) のを適切であると考えれば、時に Keats が Milton に接近し、後にこれから離脱して行つた道程は自然すぎるとしか思えない。それに比べれば Wordsworth はまだ「神秘の重荷」に忠実なだけ時により一層 real に感じられたのだ。Milton は明哲に過ぎる。人類の祖 Adam と Eve の運命は計算済みなのである。

このような時 Shakespeare は Keats に一層多くの親しみを持つて感じられている筈である。

“Shakespeare possessed so enormously—— I mean *Negative Capability*, that is when man is capable of being in uncertainties, Mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact and reason.” (p. 71)

とは1817年12月 George と Thomas 二人の弟に寄せた一節であるが（ここでも *King Lear* を読んでいたことが判る）、このような “half-knowledge” に留まり得る能力の喝望は終生 Shakespeare への思慕の形で継続し、1819年3月 “A man’s life of any worth is a continual allegory——and very few eyes can see the Mystery of life…… Shakspeare led a life of Allegory.” (pp. 303-4) と述べて同様の趣旨を繰返している。

そこで我々は病身の Keats が心を頑なにして愛人 Fanny Brawne に会うまいと意志している時が Milton 的な世界に通じる時であることを知る。一流詩人としての名声が確立しない、肺を患う短軀の貧乏詩人を彼女が完全に安心させなかつたとしても責めることはできない。それにも拘わらず詩人は女性を愛せざるを得ない。Endymion が探し廻つた月の女神が生身の Indian Maid であると判明するように、彼の愛は地上の或る女の形で発現する。美しい女性は天上的であると同時に現実でなければならない。（これが分裂している時はま

だ強い恋の自覚が生れていないのであろう。Georgiana への言葉はその点で興味深い。“As a man in the world I love the rich talk of a Charmian; as an eternal Being I love the thought of you. I should like her to ruin me, and I should like you to save me.” p. 232) しかしこの愛は Keats の肉体を滅ぼす愛であり、愛することによつて彼は死なねばならぬ。だが Keats は死んで生きることが無ければ人生に意味は無いと思う。書簡集は身を焦がす愛の告白を綴りながら急調子で破局に向つて行く。

それほどの恋慕の対象であつた Fanny の非情は Keats を一時想像の世界から追放したことがある。“—or if a Sparrow come before my Window I take part in its existance and pick about the Gravel.” (p. 68) というのは例の感動と思想の間を動揺している時の一節であるが、これを読むとき私はむしろ Keats の孤影を追っているのに気がつく。人が不幸におちたとき「仕方がない」と言うのを私の “heartlessness” でなくて “abstraction” だと考えて頂きたいと言うその abstraction とは、単なる自失の姿でなくて、冷たい哲学に変化し得るような危険な何物かであると考えられたものであろうか。また初期の彼が *King Lear* に感心したのは

“the excellence of every Art is its intensity, capable of making all disagreeables evaporate, from their being in close relationship with Beauty and Truth——” (p. 70)

に聞かれる “intensity” という特質があるからであらう。*King Lear* の読み方が誤つているというのではないが、彼自身の心の「きびしさ」が共鳴を起したのだと思われる。彼が “Things real” として太陽と月と星と Shakespeare の章句とを挙げ、“Things semi-real” の中に「愛」と雲を含め、“Nothings” として「熱烈な追求」を考えた (p. 111) のは 1818 年 3 月のことである。今 *Hamlet* を味読していますと伝えた同年 5 月、Byron は “Knowledge is Sorrow” と言つているが自分は “Sorrow is Wisdom” と言いたいと述べ、更に “Wisdom is folly!” だと自嘲的に言い放つた上に、「私は Wordsworth や Milton から逃げ出した」(p. 141) と付け加えているのは、その「経験」があつてはじめて *Hamlet* の悩みが本物になるという自らの経験に引き較べての美感である。同書の

“—for axioms in philosophy are not axioms until they are proved upon our pulses:…… You are sensible no Man can set down Venery as a bestial or joyless thing until he is sick of it and therefore all philosophizing on it would be mere wording.”

とは抽象的な理想や思想の空しさと偽りとを棄てて人間性に殉じようとする決意である。理性を失うまいとする強がり、この時が詩人たらんとする願いと、詩も空しいとする憤りとの交錯する時期であつただけに Keats の暗い季節の一つであつたに違いない。

3

詩人にとって人生体験は絶体である。その中で凡ゆる価値が自らの位置を定着させようとしては、また互にぶつかり合いながら場所を移動させる。あれほど貴重なものであつた筈の詩や美が、医学の知識のある彼には紛らすことのできない死の身近かさの感覚によつてどうでも宜いものになり、鳴りをひそめ、そのことによつて更に高い詩や美を獲得する。1819年3月彼は自分だけしか解らないと思う人生の諸価値の在ることを確信した。

“Neither Poetry, nor Ambition, nor Love have any alertness of countenance as they pass by me: they seem rather like three figures on a greek vase—a Man and two women whom no one but myself could distinguish in their disguisement.” (p. 314)

それは沈黙と暗黒（或は白光）の世界である。「今宵私が笑ういわれを誰も知らない」「私は今日の真夜中にも果てるやも知れぬ」

Verse, fame and Beauty are intense indeed
But Death intenser— Death is Life's high Mead. (p. 317)

5月には“Ode on Melancholy”を書いた。

She dwells with Beauty— Beauty that must die;
And Joy, whose hand is ever at his lips
Bidding adieu; (III, 1-3)

Keats の詩美は「死」の持っている美しさを加えた不可思議な美を見せ始める。人間は幸福になることはできる。しかしそれが極限まで成就されるとき終極は何か。「死」である。Eve が樂園を去つたように、Cordelia も死んだように、悲劇が完成する。その Milton 的完全さは Keats の堪え得るところでな

い。“But in truth I do not at all believe in this sort of perfectibility —” (p. 334) 彼がこの世を “The Vale of Soul-making” と呼んだときの「魂」は「知性」の謂でないことは勿論であるが、このような鍊嶽の苦しみは彼には “a grander system of salvation than the chrystian religion” であり “system of Spirit-creation” (p. 335) であつた。そう思わざるを得なかつた。*Divine Comedy* では Paulo と Francesca の悲恋 (Canto V) にいたく同情して “I dreamt of being in that region of Hell.” (p. 325) と言つた。自らを Satan のごとく見倣して *Paradise Lost* の讚美に飽きなかつた彼は、勤勉と思想によつて自己強化を計つた挙句、孤絶の寂しさに堪え得ない彼の本質に忠実に、愛の前に降服した。彼の恋文は、触れれば身を滅ぼす運命と知りつつ灯を慕う蛾の喘ぎである。

“Ask yourself my love whether you are not very cruel to have so entrammelled me, so destroyed my freedom..... For myself I know not how to express my devotion to so fair a form: I want a brighter word than bright, a fairer word than fair. I almost wish we were butterflies and liv'd but three summer days—— three such days with you I could fill with more delight than fifty common years could ever contain..... I do not think I could restrain myself from seeing you again tomorrow for the delight of one embrace. But no——I must live upon hope and Chance.” (p. 352)

「生と呼べないあの退屈な焦立たしき」を感じながら、それが我が身を焼き尽すことを恐れる (p. 355) Keats であつた。

“So let me speak of you Beauty, though to my own endangering.” (p.356)

“I have two luxuries to brood over in my walks, your Loveliness and the hour of my death. O that I could have possession of them both in the same minute.” (p. 362)

そしてあなたの唇から「甘美な毒」を吸つてこの世に別れを告げたいと言う。

それから何箇月かの後の 1819 年 9 月 George と Georgiana に送つた書簡の一節に “Nothing strikes me so forcibly with a sense of the ridiculous as love. A Man in love I do think cuts the sorryest figure in the world.” (p. 401) と恋する者の慙れさを述べ、“Pensive they sit” に始まる詩を書きこんだ。そして Burton の *Anatomy of Melancholy* を最近読んでいたと言つてその一部を書写しているが (pp. 404-5)、決して素朴で無邪気な青

年らしさではない。10月に書いた次の言葉も単なる恋文の常套句でないらしいのに不気味な思いがする。

“Love is my religion—— I could die for that. I could die for you. My Creed is Love and you are its only tenet.” (p. 435)

“I purpose living at Hampstead. . . . I should like to cast the die for Love or death. I have no Patience with any thing else——” (p. 437)

彼は転地先から療養をやめて Fanny の住む近くの自宅に帰ると言っている。

翌1920年1月義妹 Georgiana への一節には

“Robinson Crusoe when he saw himself in danger of perishing on the Waters look'd back to his island as to the haven of his Happiness and on gaining it once more was more content with his Solitude.” (p. 448)

と言っているのは、前年11月 “Wonders are no wonders to me. I am more at home amongst men and women.” (p. 439) と言うと同時に「戯曲を書くことが最大の野心です」と言つて、やがて書けなくなる筈であつた客観的 genre に希望を託したのに比して、果して孤独に満足した気持と言えるだろうか。何故なら Georgiana には続けて “Upon the whole I dislike mankind:” (p. 451) “I am tired of the Theatres.” (p. 452) と洩らしているからである。

彼の痛ましさは理想が地上を離れ得ないこと、凡ゆる抽象が彼自身の現実となつて帰つて来ることであつた。1820年8月に書いたと推定される Fanny Brawne への手紙では “Hamlet's heart was full of such Misery as mine is when he said to Ophelia 'Go to a Nunnery, go, go!'" (p. 503) と烈しく恋人と世間とを恨んでいる。“My imagination is a monastery and I am its monk——” (p. 508) と P. B. Shelley に告げる言葉は健気であるが再度の咯血の後であるだけに新たな悲壮感が漂う。

この動揺して止まない気分は “To a Nightingale” (July 1819) の stanza 毎に醸し出される情調の変化に類似する。鳥は時々居場所を移し、詩人は幸福と苦痛と麻痺を味い、現実と夢の間にさまよつて怠惰 (cf. *Letters*, pp. 314, 346 etc.) に忙しい。幻想の背景は海上の孤島や遠い異国にまで及んで庭園の現実と交錯する。現実の鳥が空靈的な存在に聞える瞬間がある。南国の葡萄酒の豊醇

に寂寥の影が落ちる。そして想像の領土の何と危うい弱々しさであろう。

Was it a vision, or a waking dream?

Fled is that music:— Do I wake or sleep? (III, 9-10)

夢と現実、感動と思想の間の世界に憑かれた Keats の耳にいつも響いて聞えるものは何か。

“the passage in Lear— ‘Do you not hear the sea?’— has haunted me intensely.” (p. 20)

“This morning Poetry has conquered— I have relapsed into those abstractions which are my only life—I feel escaped from a new strange and threatening sorrow.— and I am thankful for it.— There is an awful warmth about my heart like a load of Immortality. Poor Tom— that woman—and Poetry were ringing changes in my senses.” (pp. 216-17)

“Some of the phrases she was in the habit of using during my last nursing at Wentworth place ring in my ears. Is there another life? Shall I awake and find all this a dream?” (p. 522)

困難なことには、真理はそのように泡立ち沸騰する動揺と耳鳴りの中で夢みることのできる想像の媒介によつて把えられる。「詩、野心、愛」の変装を見破ることは難しい。(cf. p. 314) 「詩、名声、美」は「死」の洗礼を受けねばならない。(cf. p. 317) “Ode on a Grecian Urn” の静寂と沈黙はその動揺の振幅の一つの極限であると共に、また美と真を把む一つの方法である。

私はここで E. M. W. Tillyard と Murry の論争に触れてみたい。*The Miltonic Setting* において Tillyard は Murry が *Keats and Shakespeare* で Keats が Milton に反撥したように書いているのは誤りであると言つて (p. 31)、“Lycidas” と “Ode to a Nightingale” との間の類似を強調する。(p. 32)

“The theme of *Lycidas* can be put in nearly the same terms as those used for the *Ode to a Nightingale*. Death, sorrow, the futility of ambition, the corruption of human nature; the desire to escape them; acceptance of them in the end; and following it renewed vitality.” (p. 35)

これに対して Murry は その書 *Keats* の中で、Shakespeare と Keats とは catholic feeling-type であり、Milton は protestant feeling-type であると言ひ (p. 252)、更に

“Keats’s poetry is charged with warmth and mystery, like a pulse in the blood, while Milton’s is not. Keats was not a professed Christian,

while Milton was; yet Keats, I should say, was much more a naturally Christian poet than Milton.” (p. 253)

と言つて *Keats and Shakespeare* および *Heaven and Earth* の論調を今一步進めて Keats と Milton との距りの大きいことを主張する。例えば Tom の没くなつた時の苦悩の神秘感は Milton には無く、“Lycidas” は「知的想像」の詩であると断言する。(p. 245) Murry の判断では “The First Hyperion” (Winter 1818-19) を書いていた時期の Keats が Milton 風な人工的筆致であつたことまでは否定しないが、1819年8月14日 Bailey に Shakespeare と *Paradise Lost* が素晴しく思えると伝え、25日 Reynolds に対しては *Paradise Lost* が素晴しくなつてくると言つた時、確かに後者では Shakespeare の名前が消えているが、Milton が Shakespeare を圧倒し去つたのではないという *Keats and Shakespeare* (pp. 166-67) の自説を再確認し、何の変更の必要も無いと反撃している。(p. 257) Murry はその時の Keats は Fanny Brawne を、また「男や女の世界」を己の心情から締め出し、それと共に Shakespeare を締め出したのだと言う。Shakespeare はにがい愛の経験に堪え、大衆と和解することによつて偉大さを示したが、Keats は彼に随いて行けなかつた。必然的に Keats は Milton の remoteness と abstraction という憎悪すべき筈の要素を自らの理想として採り上げんとし、また壮嚴ではあるが無情な神学的 drama を目指した Milton の精緻な芸術と人間の宿命の無視との中に、人生の苛責からの逃げ場を見出そうと必死の努力を続けていたと解釈している。ここから “Hyperion” の嚴肅な暗さに対する同情的理解も生れるであろうし、“The Second Hyperion” には Miltonic な語法の少いことと同時に、更にその頃の Keats からすれば、既に不寛容に過ぎる理法への不満が未完のままこれを放棄させたのであると解することができる。

4

そして “To Autumn” (Sept. 1819) に到ると、秋の穫入れの明るく豊かな田園風景が展開し、愛に身を委ねた Keats の姿を見ることができるよう。

Season of mists and mellow fruitfulness,
Close bosom-friend of the maturing sun;

の書出しで、穀倉や畦道に寝ている「秋」の擬人的描写も楽しい。ここは再び南英的、地上的な風土である。Caroline Spurgeon は *Keats's Shakespeare* の中で *Endymion* に及ぼした *Tempest* の影響を指摘しているが、その一部分 (pp. 58-59) について私にはむしろ “To Autumn” に対する影響が明瞭であると思われる所がある。Ceres が歌う。

Earth's in increase, foison plenty.
Barns and garners never empty;
Vines, with clust'ring bunches growing;
Plants with goodly burden bowing;
Spring come to you at the farthest!
Scarcity and want shall shun you;
Ceres' blessing so is on you. (IV, i, 110-17)

9月21日これを裏書きするように Reynolds に宛て

“How beautiful the season is now —How fine the air. A temperate sharpness about it. Really, without joking, chaste weather— Dian skies —I never lik'd stubble-fields so much as now— Aye better than the chilly green of the Spring. Somehow a stubble-plain looks warm— in the same way that some pictures look warm— This struck me so much in my Sunday's walk that I composed upon it.”

とこの詩を書く動機になつた散歩の印象を述べ、続けて “I always somehow associate Chatterton with autumn. He is the purest writer in the English Language.” (p. 384) と言つてから例の Milton との絶縁を宣言する文句を綴るのである。

ところで「春」を持出してその冷やかな緑よりも秋が好きだと言つているのは印象深い。春は Ceres の歌でも言及されて秋の描写の効果に一役買つているが、“To Autumn” では第3 stanza の初めに出て、春を心の底に意識しての秋であることを知らせる。

Where are the songs of Spring? Ay, where are they?
Think not of them, thou hast thy music, too—

この Ode で秋の姿が黄金色の結実の豊かさだけを用いて表現されていないことは当然注目されなければならない。何故なら秋は “Drows'd with the fume of poppies” という恰好で寝ているし、雲が “the soft dying day” を彩つて

いる。別に悲哀が目立つのではないが “a wailful choir the small gnats mourn” が聞え、軽やかに風が渡るかと思えばひそと静まる—— “the light wind lives or dies.” Arnold Davenport は “A Note on ‘To Autumn’ ” においてこれらの語句を重視して

“these are touches that come closer to the world of the *Ode to a Nightingale* than to happy fulfilment, and suggest that there is more in the poem than the naive celebration of fruitfulness.” (*A Reassessment*, p. 96)

と言い、Herford 流の解釈を斥けて、第3 stanza 最初の2行がこの詩全体の要であるとしているのは正しいと思う。“Nightingale” の動揺が “Urn” の静寂を得たのが “Autumn” であると言えるのではあるまいか。

我々の心の振幅は季節のめぐりに等しい。そして夏と冬という極限の間を彷徨する。どちらかの境界近くに身を寄せる態度が、時に Wordsworth を、時に Milton を親しく感じさせる結果となり、その両方の極限を望んだ時の苦しさ、焦燥、そして成熟が Shakespeare への信仰となる。それが五里霧中に善悪を弁じ得ない神秘の重荷であり、不安や懷疑を超越した「否定的能力」を通じて「懈怠」の中から「豊かなる悲しみ」の詩が生れる。それはまた神と悪魔を包みこむ Melville の「白い世界」であり、Henry James が「巡礼」する世界であろう。Keats の生長において偉大さへの期待が寄せられるのは、このような指向が晩年に開花したのみでなく Shakespeare への思慕と併行して発芽していることである。例えば Bailey への書簡 (p. 111) に入れられた “Four Seasons fill the measure of the year” に始まる Sonnet は Fanny を知る半年も前に、そして Scotland 旅行の経験もない頃に書かれているが、四つの季節を自己の風土に消化し得る能力を暗示している。*King Lear* を再読して詠んだ “The bitter sweet of this Shakespeareian fruit” の一行を含む Sonnet は更に遡つて1月に書かれている。(p. 88)

そして Keats の秋が “mists” と “clouds” に包まれ、長い髪をなびかせる女性の姿で擬人化されているとき、“Things semi-real” として “Love, the Clouds &c” を挙げたことと思えば併せれば、それが “Nothings” でないにしても、Shakespeare の文章を含めた “Things real” でもないことに驚きを覚

える。“The Imagination may be compared to Adam’s dream—he awoke and found it truth.” *Letters*, p. 67) 期せずして擲んだ “half-knowledge” によつて “I think I shall be among the English Poets after my death.” (p. 231) という予言は的申したのである。

BIBLIOGRAPHY

- Bowra, C. M. “Ode on a Grecian Urn.” *The Romantic Imagination*. London, Oxford University Press, 1957. pp. 126–48.
- The Complete Works of Shakespeare*. Edited with a Glossary by W. J. Craig. London, Oxford University Press, 1930. 1352 p.
- The Divine Comedy of Dante Alighieri*. Translated by Henry F. Cary. New York, Thomas Y. Crowell & Co., Publishers, c1897. 476 p.
- The Letters of John Keats*. Edited by Maurice Buxton Forman. Fourth Edition with Revisions and Additional Letters. London, Oxford University Press, 1952. 570 p.
- Muir, Kenneth, ed. *John Keats: A Reassessment*. Liverpool University Press, 1958. 182 p.
- Murry, John Middleton. *Heaven— and Earth*. London, Jonathan Cape, 1938. 383 p.
- Murry, John Middleton. *Keats*. London, Jonathan Cape, 1955. 322 p.
- Murry, John Middleton. *Keats and Shakespeare: A Study of Keats’s Poetic Life from 1816 to 1820*. London, Oxford University Press, 1926. 248 p.
- The Poetical Works of John Keats*. Edited with an Introduction and Textual Notes by H. Buxton Forman. London, Oxford University Press, 1946. 496 p.
- The Poetical Works of John Milton*. With Introduction by Edmund Gosse. London, Ward, Lock & Co., Limited, n. d. 423 p.
- Spurgeon, Caroline F. E. *Keats’s Shakespeare: A Descriptive Study Based on New Material*. London, Oxford University Press, 1928. 178 p.
- Tillyard, E. M. W. *The Miltonic Setting: Past & Present*. London, Chatto & Windus, 1949. 208 p.
- Trilling, Lionel. “The Poet as Hero: Keats in His Letters.” *The Opposing Self: Nine Essays in Criticism*. London, Secker and Warburg, 1955. pp. 3–49.